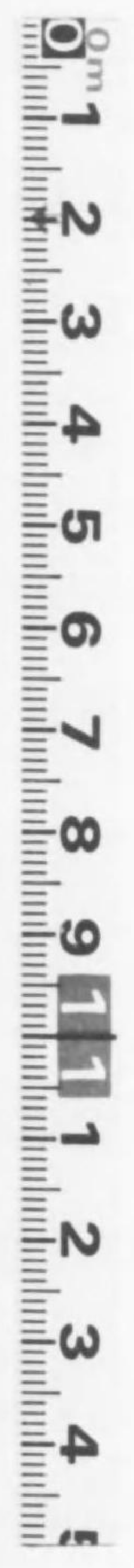


301
69



白隱和尙

藪

柑

10.7. 1

子

全

始





白隱禪師撰述

藪柑子

(貳百部限定刊行)

東京龍吟社版



藪柑子解説

白隠和尚、先妣五十年忌に當りて、追修の爲めに撰述して岡山侯侍側に送りたるもの、即ち六十九歳の時なりとす。無生音を聞くの念要なることを説似して尤も親切を極めたり。自筆刻本に依れり。

本書は、白隠和尚全集發行の淨業に關し指導鞭撻を賜りし諸先生に贈るため、同全集より抜刷製本せるものなり。

白隠和尚全集發行



藪柑子

岡城大侯隠君の侍側 富郷賢妹の需に應ず。

卯月二十七日の御文、五月初めに落掌、貴命之通、過し頃は法雲精舍に於て圖らざる見參、怡悅淺からず令存候。其後、大侯隠君其外何れも恙なく御歸城増御健康の旨珍重此御事に候。其節被仰置候には、道情をも助け増し、見道の指南にも罷成るべき法話一篇書進候様にとの御事、御奇特千萬の御所望感入存候へば、努々御如才には不存候へども、彼是取紛れ延引に打過ぎ申候。昨五月二十七日は愚母五十年の遠辰に相當候へば、追善の爲め何をかなと考へ見合せ候へども、誦經書寫禮拜恭敬等の佛事も老來叶ひがたく侍れば、是を幸に貴姉日頃御所望の法語一篇書き認め候て、法施供養の一助とも罷成らば、何よりの追福ぞと、廿五日の暮方より取りかゝり、同じき廿六日の夜半過ぎ迄に急に清書

致し、翌朝、牌前へ手向け申候。處々落字等も多く、文字の顛倒も間々相見へ候へども、此度進覽致候。管々しき拙語、他見は憚入候へども、近侍の人々には内々にて御讀み爲聞被成候へば、法施にも罷成べく、是亦菩薩行の手習ひなるぞと思して、時々御讀み可被成候。先づ可申述は、縦ひ老僧御望に任せて内典外典を考へ合せ、種々の法理を際限もなく書付け進候とも、門より入る物は家珍にあらずと申傳へ侍りて、生死透脱の助けには更々罷成らざる事に侍り。唯願はくば自性本有の有様を一回分明に見得し玉ふに越へたる事は侍らず。彼の自性本有の有様は如何にして見届くべきぞとならば、大凡番々出世の如來、三世古今の賢聖智者たちの頓漸半滿顯密不定等の法理を、數限りもなく説き置かれ侍れど、只肝心の處は行者勇猛の志を上げまし、直に進んで退かず、因地一下の歡喜を得ざらん限は、必定決定退惰の心を生ずまじきぞと覺悟し玉ふより外別の子細候はず。蓋し彼の因地一下の歡喜は如何して得べきぞとならば、

大疑の下に大悟ありと申して、唯今此文を披覽し、或は笑ひ或は談論し、萬縁に應じて、夫れくゝに働きもて行く底、是れ何物ぞ。是れ心なりや是性なりや、青黃赤白なりや、内外中間に在りやと、是非々々一回分明に見届けずば置くまじきぞと、十二時辰、三四威儀たけく精彩をつけ、間もなく勵み進み侍らば、いつしか妄想思量の境を打越へ、前後際斷の工夫現前して、男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず、唯一向空洞洞地虚濶々地にして、晝夜の分ちを見ず、心身ともに消へ失する心地は、幾たびも有之事に候。此時、恐怖を生ぜず、間もなくはげみ進み侍れば、いつしか自性本有の有様を立處に見徹し、眞如實相の慧日は目のあたり現前して、三十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞かざる底の大歡喜は求めざるに煥發せん。是を見性得悟の一刹那とも名づけ、是を往生淨土の一大事とも相傳する事にて、自心の外に淨土なく、自性の外に佛なし。一念不生前後際斷の當位を往と云ひ、

實相の眞理現前の當位を生といふ。此等の眞理に達せず、世間の數限も無き後世者達の佛にならん淨土に生れんと難行し、苦行し、持戒し、持齋し、誦經し、書寫し、種々の善行をはげみ玉へども、多くは天上の善果を受け、人界にては天子將軍、公家殿上人乃至大名高家等の富貴自在の身に生れ玉ふより外、成佛は叶ひ難き事なり。如何となれば、心の外に佛なく、心の外に淨土なきが故に。然るに彼の人間天上の善果は羨しからぬ事こそ有なれ。生天の福は、天を仰いで箭をいるが如し。勢力つきぬれば、箭却て落つといへり。彼の天人の如きは、前生修福の力に依りて、一旦天上に生ずといへども、過去の福報を受け盡しぬれば、五衰等の醜相を現じて、果ては下界に下り、或は惡處に墮す。況んや人界に於て富貴自在の人をや。過去の善根力に答へて、今世の富貴を得たる事は、露ちり忘れ果て、尊貴を待み、勢位に誇りて、民を食り苦しめ、物命をいため害し、あらぬ様なる罪障を積み重ね、果てしもなく惡業を作り添へて、來生

は必ず三塗八難の惡趣に墮す。然らば即ち前生の千難萬苦の善業は、今生の富貴榮耀と成り、今生の福貴榮耀は、來生の鐵床火坑の苦患と成る。此故に癡福は三世の冤とも申し置かれ侍り。大凡後世菩提の指南は數も限もなき事に侍れど、多くは方便の説を出でず。最上至極の指南は、特り此見性得悟の眞修に越へたるは必定決定なき事に侍り。さる程に法華經にも、三世古今の教主の如來は、一切衆生をして佛智見道の眼を開かしめんが爲めに世に出現し玉ふと説き置かせ玉ふ。されば大覺調御も娑婆往來八千度の生死を歴させ玉ひたれども、最後雪山に入りて開佛智見見道の望を遂げさせ玉ひて、初めて無上正等正覺を唱へさせ玉ふ。此故に三世古今の間に見性せざる佛祖なく、見性せざる賢聖は半箇も亦無き事に侍り。然らば則ち無量恒沙の萬善萬行も此の見性の一法に越へたる事も無き事なりと覺悟之れ有るべし。老夫初め十五歳にして出家、二十二三の間、大憤志を發して、晝夜に精彩を着け、單々に無の字を擧揚し、二十

四歳の春、越の英嚴練若に於て夜半鐘聲を聞いて、忽然として打發す。夫れより今年まで四十五年が間、朋友親戚を擇ばず、老幼尊卑をすてず、何卒一回大事透脱の力を得られよかしと、或は自己に付いて疑はしめ、或は無の字を參究せしめ、種々方便を廻らし、提携教諭しけるに、其中間、少分の相應を得て歡喜を得たる人々は、大凡數十人に及ぶべく覺へ侍り。此五六ヶ年以來は、思ひ付きたる事侍りて、隻手の聲を聞届け玉ひてよと人毎に指南し侍るに、從前の指南と拔群の相違ありて、誰にも疑團起り易く、工夫進み易き事、雲泥の隔有之様に覺へ侍り。是に依りて唯今專一に隻手の工夫を勧め侍り。蓋し隻手の聲とは如何なる事ぞとならば、即今兩手打合せて打つ時は丁々として聲あり。唯隻手を舉る時は音もなく香もなし。是れ彼の孔夫子の所謂烝天の事といはんか、將又彼の山姥が云ひけん一丁空しき谷の響は、無生音をきく便り成るとは此等の大事にや。是れ全く耳を以てきくべきにあらず、思慮分別を交へず、見聞覺

知を離れて單々に行住坐臥の上に於て、透間もなく參究しもて行き侍れば、理盡き詞究まる處に於て忽然として生死の業根を拔翫し、無明の窟宅を劈破し、風、金網を離れ、鶴、籠を抛つ底の安堵を得。此時に當りて、何時しか心意識情の根盤を撃碎し、流轉常没の幻境を撥轉し、三身四智の寶聚を運出し、六通三明の神境を超過す。貴ぶべし隻手纒に耳に入る時は、佛聲、神聲、菩薩聲、聲聞聲、緣覺聲、餓鬼聲、修羅聲、畜生聲、天堂聲、地獄聲、世間所有の一切の音聲毫釐も聞残す事なし。是を清淨の天耳通といふ。隻手纒に耳に入る時は、自界他界、佛界魔宮、十方の淨刹、六趣の穢土、一見に見徹して掌果を見るが如し。是を清淨の天眼通と云ふ。隻手纒に耳に入る時は、廣大劫來輪轉昇沈の跡、塵點劫後往復遷流の影、昭々焉として寶鏡に對するが如し。是を清淨の宿命通といふ。隻手纒に耳に入る時は、喫粥喫飯、運動施爲、是れ修得底にあらず、學得底にあらず、人々本具の活三昧なる事を徹了す。此時に當りて華嚴の四種

の法界、法華の唯一乗、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る、穢土を轉じて淨土となし、凡身を變じて佛身と成す等の大事、燦然として目前に充塞す。是を清淨の神境通といふ。隻手機に耳に入る時は、自心、他心、親戚心、佛心、神心、衆生心、一見に見透して疑惑なし。是を清淨の他心通といふ。隻手機に耳に入る時は、人々本具の心上一點の無明なく、一點の生死なし。廣大圓明、高閑虛凝、是を清淨の漏盡通といふ。此時に當りて、百千の法門、無量の妙義、世間所有の功德聚、世間所有の寶莊嚴、盡く自己の心上に具足して、毫髮ばかりも欠闕なし。初て知る、六度萬行、體中に圓なる事を、人間天上の善果、何事か之に勝らん。三賢四果の歡喜も豈に此に過ぎんや。嗟呼、其の得がたく、受け難き者は人身なり。逢ふ事まれに、聞く事希れなる者は佛法なり。今に既に受け、今既に聞くといへども、空しく夢幻の名利を慕ひ、空華の貪愛におぼれて、徒爾として一生を過して懲りもなく險難三塗の舊里に立ち歸りて、



俱底恒沙の苦患を受く、寔に惜むべし、寔に悲むべし。厭ひても厭ふべきは、娑婆穢土の塵垢、恐れても恐るべきは六趣三塗の苦果、佛法中には因果を信じ苦難を恐るゝを以て大智慧とし、自心を了知し、自性を見徹するを賢聖佛祖とす。悲むべし、世間多少世智辯聰の大癡人あり。纔に三五卷の書を読み、三五座の讀講を聞く時は、自ら智者なりとし、自ら俊傑なりと稱して、因果を破し、三世を無みするを以て自ら賢なりとし、自ら智なりとして、人の因果を信じ、來生ある事を恐れて誦經し、作禮し、慈善を行ずるを見て、手を拍て大笑す。あゝ何んの心ぞや。大凡人を萬物の靈と稱して、馬牛、犬豕、豺狼、麋鹿に異なる所以は、三世ある事を信じ、來生ある事を信じ、苦難を恐るゝを以てなり。備等が所望に任せば、一切の人をして馬牛、豺狼、麋鹿に齊しうして飽き足る者ならんか。古の賢聖、古今の智者及び賢臣明主と雖も、因果を信じ、苦報を恐れ玉はざるは半箇も亦た無し。若し夫れ因果を撥無し、三世を毀廢し玉は、

普天の下、王土にあらずと云ふ事なし。何の佛場神區をか留めん。率土の濱、王臣にあらずと云ふ事なし。何の沙門僧尼をか容るさん。古、吾が本師世尊の如きは、五印度の主、淨飯大王の太子にて渡らせ玉ひたるすら、六趣三塗の苦難を深く恐れさせ玉ひ、金輪の寶位、萬乘の貴階を抛下して、あらくしき仙人に責め使はれ、後雪山に入りて六年端坐、絲もて瓦を編みたてたる如く瘦せ衰へさせ玉ひ、初て金剛の正眼を開かせ玉ひて、終に三界の導師とならせ玉ひき。又中將姫の如きは、殿上殿下に比類もなくあてやかの御形なりければ、天子の中宮にかしづき奉らんとて、人々のめきあへりけるに、玉簾の中も火宅の外ならずとて、夜半に帝都を忍び出でさせ玉ひ、雲雀山に入りて目もあてられぬ難行を歴させ玉ひ、上もなき法眼を開かせ玉ふ。其外貴介公子、英雄富豪の人の來生春磨の苦患を恐れて、身命を抛ち、恩愛を見捨て、出家遁世せられけるは、數も限りもなき事に侍り、然るを況んや我輩塵芥の微軀、鄙賤の殘質

をや。縦令又神仙の齒算ありて、八萬の歳時を守るも、空華遮り、野馬隙を過ぐ。況んや若輩蜉蝣の保ち難き命、水泡の堪へ難き身をや。末の露、本の雪にも劣りたる物を、いつまで待つとて、盲驢の足に任せて行くが如く、半日の行持をだに保たて、寔に貴ぶべき月日を徒らに明し暮しもて行くやらん。何の頼みありてか、狂猿の心に任せて飛びめぐる如く、惜むべき身命を、一善の覺もなく、空しく老い朽ち果つる事ぞと深く慚愧の心を起し玉ふべし。熟々流轉常没の世の有様を顧るに、天堂に生ずべきには福力足らず、地獄に墮すべきには罪業足らず、ゆくりなくも此の娑婆穢土の受生を引く。此故に貧鄙あり、貧富あり、賢愚あり、利鈍あり。須らく知るべし、皆是れ前生の作業善惡の影像なる事を。尊貴は天上の福力足らず、凍餒は地獄の罪業足らず、恐るべし慎むべし。各々勤めはげみて、露命消へざる程、身體破れざる間に於て、驚き恐れ玉ひて、隻手の聲を聞届け玉ふべし。其後一切の音聲を止め得玉ひたりとも、

精粗あり遠近ある事に待れば、老僧が膝下に於て舊參親しく穿鑿を歴たる僧を
 尋ね求め玉ひて、親しく證據し決定し玉ふべし。假令如上の因縁を證據し了知
 し玉ひたりとも、以て足れりとして容易に休罷し玉ふべからず。古來出格の見
 地ありて知勇兼備の智者高僧も、佛國土の因縁、菩薩の威儀を知らざる時は、
 五派七流の大事を空盡したりとも、計らず二乘小果の白業に墮し、或は隔生即
 忘の故に思ひ設けぬ受生を引く。斯く言へばとて、今時諸方頑空無記の修行者
 達の如く、灰心泯智、斷滅空の深坑に陷墜するの謂にはあらず。何をか佛國土
 の因縁、菩薩の威儀といふぞとならば、是れ即ち二乘小果の空谷を超越して、
 大乘菩薩の實處に赴く善巧なり。此故に維摩經に曰く、慧なきの方便は、足有
 りて目なきが如し。方便なきの慧は、目ありて足なきが如し。目足互に相扶け
 て終に實處に到ると。大凡十方の賢聖、古今の智者、法成就に到らんがために、
 常に願輪に鞭うつ。此故に普賢に七十の願あり、彌陀に四十の願あり。何れも

上求菩提の爲めに下化衆生の大法施を行す。須らく知るべし。佛法は海の如く、
 漸く入れば漸く深く、佛法は山の如し、轉た登れば轉た高きことを。悲むべし
 澆季末代の習ひ、法滅盡時の驗にやあらむ。多衆圍繞の宗匠碩徳、高名の耆舊
 も、徒に空しく無念無心、灰心泯智の死法を以て禪門向上の宗旨とし、寂黙枯
 坐、古廟裡の香爐にし去りて、祖師眞修の寶處とす。頑空無記、暗鈍昏愚を以
 て、大事了畢の堂奥とす。點檢し見來れば、一丁字も亦知らざる底の臭賸禿
 破凡夫、何の力有りてか法城を鎮護し、宗旨を扶起し去る事を得む。又或は一
 般世智辯聰の大癡人あり、空見に誇り小智を恃んで、即ち曰く、佛祖も是れ空
 寂無相、古則公案皆是れ空文にして、一法の執るべき無しと。佛祖を併吞し、
 諸方を罵詈す。恰も狂狗の聲を限りに吠ゆるが如し。拘下して取るに足らず。
 唯是れ一肩無頼の頑陋、奴賤賸夫、食堂に放ちて粥飯を貪餐せしむる外、半點
 の所能なし。何の備有りてか、識量寛大、智鑑高明の士大夫をして歸降せしめ、

國王大臣有力の檀越をして佛法ある事を知らしめん。悲い哉、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衝震ふ。百年以來真風一變して禪徒醜態を成す。禪にして淨土を兼ねる底麻の如く粟に似たり。昔は外現是聲聞、内秘菩薩行。今は外現佛心宗、内秘は即ち淨土行。恰も一器にして水乳併せ盛るが如し。進んで曲衆木牀上を望めば、紅羅の大帽を着け、紫錦の方袍を掛く。白拂裊々として煙を捲き、金鴨亭々として霞を吐く。形容凛々、威儀森々、十力の調御の如く、四果の聖者に似たり。見る者覺えず腰を屈むるあり、掌を合するあり、頭を叩くあり、涙を垂るゝあり、眞正の々相承底の活祖師、恰も佛魔も近傍し難き者に似たり。財産を聚め收むる事は、目連の神通あり、在家を諂縛する事は、滿慈の辯才あり。正眼に看來れば、一點見性の筋力なく、一點透過の氣血なし。此故に進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐れあり。又聞く、僧と成りて理に通ぜざれば、身を復して信施を還へす。長者八十一、其木茸を生ぜずと。今世は種

種殊勝の境界を現じて世上を誑惑し、在家に追從して、許多の禮拜供養を受くと雖も、來世は必ず惡種の底に墮して、肉抹骨磨の苦患、洋銅鐵丸の受報を如何。子細に思念すれば、寒毛皆よだつ。此に於て即滅無量罪の佛誓を頼みて、袖裡に竊に念珠をつまぐり、口中ひそかに稱名念佛して、淨刹の迎生を願ふ。寔に憐むべし。是れ向きに所謂一點見性の筋力なきの現證なり。是れ向きに所謂一點透過の氣血なきの靈驗なり。恁麼にして傳燈歷代の祖と稱して可ならんや。見よ、西天の四七、東土の二三、及び傳燈千七百個の賢聖、江西、濟北、南泉、長沙、黃檗、汾陽、慈明、楊岐、眞淨、黃龍、息耕、大慧の諸老、其餘の實參實悟の俊英、破口にも往生淨土の事を説かず、專稱迎生の事を求め玉ふは、半個も亦無し。何が故ぞ。初め見性得悟の一刹那に、南隣北舍、總に是れ七種寶樹の淨刹、張三李四盡く是れ無量壽尊、紫磨金の全身なるを見徹すればなり。是れ即ち開佛智見道の靈證なり。此外更に何をか求めん。彼の龍樹大士の如き

は、中下の機を救はんが爲めに、彼が唱へくへて一心不亂の處に到りて、いつしか唯心の淨土に投入して、往生の大事を決定せしめんが爲め、且らく此の一門を設け玉ふが如し。此故に彼の專稱稱名淨業の宗趣の如きは擱いて論ぜず。備等身は禪門に在りて、肩に心宗の法衣を掛け、口に一員の禪徒なりと稱して、内には竊に稱名念佛して、禪門を汚辱し宗趣を混亂することは、何たる事ぞや。若し眞正淨業を追慕し佛名を信受するぞとならば、何ぞ明白に淨家の一員淨業の上人と成りて、總盤を張り、木鉦を居え、普く四衆を勸化し、晝夜に高聲念佛して、大事を決定せざる。胡爲ぞ其怪しきや。他の獅子皮を着けて却て野干鳴を成す者とせんか。恰も蝙蝠の鳥にもあらず鼠にもあらざるが如し。動やもすれば禪門宗匠の眞似して塵拂を舉揚し、竹篋を拈し、拄杖を引く。是れ何れの用處ぞ。專唱稱名の人、一箇の木鉦を居うれば足れらくのみ。何ぞ者般の閑家具を用ひん。法印の○を貯へ、盲母の鏡を愛するに似たり。熟らく願ふに、

若し今時の所見に任せて足れりとせば、世尊如來の如きも轉輪の王位を辭せず、三千の愛妃をもすて玉はで、恣まゝに五印の福貴を受けつくして、老來稱名念佛して淨土に生ぜば足れらくのみ。十九出家の悲嘆、雪山六年の苦辛、胡爲れぞ其れ拙きや。其餘の五百の大弟子衆等、日中一食樹下一宿、脇尊者の如きは、四十年脇、席に着かず、二祖は臂を斷ち、白崖は四十年脚、關を越えず、玄沙は脚を傷ひ、臨濟は三度問を發して三度打たれ、雲門は左脚を遍折し、慈明は股に錐す。胡爲れぞ其れ拙きや。盍んぞ稱名して淨利に往生せざる。且夫れ達磨大師の如きは二三行の書を漢土に送り、專唱稱名、淨利に往生せよと言は、足れらくのみ。何んぞ許多の艱險を喫し、十萬里の波濤を凌ぎて此の見性の法を傳へん。將た其れ古へ多少の賢聖未だ淨利ある事を知り玉はずと云はんか。怪哉、古は大に艱く今時は大に易き事や。古の難きが是ならば、今時の易きは非ならん。今時の易きが是ならば古の難きが非ならん。時に管城子といふ者あり、

曰く、近來我が日域、洞濟兩徒の禪徒、默照枯坐、無念無心の部屬の如き、老
 來七旬に近き族に專唱稱名せざるは半箇も亦侍らず。然るを獨り彼の禪徒を責
 むる事、胡爲れぞ其れ甚しきや。予が曰く、原ぬるに夫れ我が日域禪門念佛の
 濫觴は、實に彼れ泯水なり。泯水塞がされば、楚江猶深し。云ふことなかれ、
 鵲林半死の残喘、何の求むる處ありてか、俄かに他の一流の禪徒を呵すと。予
 が心上哀嘆沈鬱忍びざる處ありて、驚悲の餘り覺へず此の苦言を吐く。譬へば
 草木の聲なきも、風是を動かせば鳴るが如し。昨日一僧あり曰く、大唐禪林の
 名藍巨刹たる徑山、天童、興聖、淨慈、江西、南岳、牛頭、報恩、其の律院教
 寺に至るまで、盡く皆頽廢亂壞、一字も残らず、賣場鋤かれて細民の舎となり、
 磬鐘は鑄られて農夫の犁鋤となりぬ。其餘の佛像經卷織塵を留めず、獨り慈□
 の深禪師の遺蹤のみ纒に残るといへども、屋壁碎け落ち廊廡傾き頽る。荆棘列
 り生い、藤蔓しげり纏ふ、閑神盡悲しみ、野鬼嗥哭すと。嗟吁、古へ禪門の盛

なりし時、法幢堅高、規矩尊嚴、喝雷魂を奪ひ、棒雨膽を裂く。王侯蓋を列ら
 ね、緇素踵を接ぐ。嗟吁、時乎命乎、未だ二三百年を経ざるに、胡爲れぞ其れ此
 の極に到るや。是れ天にあらず、是れ命にあらず、灰心泯智、禪門念佛等の邪
 黨に傷賊せられ、默照邪禪、無念無心等の魔風に吹倒せられて、遂に此の荒蕪
 を見る。熟らく願ふに、此等の部類は盡く是れ眞風衰滅の大兆、佛道斷滅の大
 前表、寔に三武の暴逆に過ぎたり。三武は外より責む、此故に久しからずして
 回復す。七流は内より潰ゆ。此故に佛手も醫すること能はず。譬へば傷風と内
 症との如し。我が日域佛道の衰滅漸く久しかるべからず。云ふこと勿れ、禪に
 して淨土を兼ぬるは、虎にして翼を挟むものなりと。錯々、此に人あり、重病
 を膏肓の間に結ばんに、其人必ず久しからずして死せん。禪若し淨土を兼ねば、
 其の禪必ず久しからずして亡びん。嗚呼、禪乎禪耶、西四七、東二三、的々相
 承し來りて、實に八宗の綱梁たり。譬へば北に一字の廣厦あらんに、梁棟若し

碎け落ちて其餘見るに足らざるのみ。大唐佛道の断滅豈に怪しむに足らんや。
 須らく知るべし、禪は果して容易ならざることを。昔し吾初祖達磨大師の如きは、八歳にして殿上に親しく、驪珠を辨得して群を驚かし、衆を動かし玉ひし程なるすら、後來出家、般若多羅に随侍すること二十年にして、深く蘊奥を究め玉ひき。禪は果して容易ならず、此故に佛の言く、我が弟子大阿羅漢、此義を解すること能はず、唯大菩薩のみありて、正に此義を解すべしと。寔に此事は難信難入、難透難解なり。さる程に片言を出す事、大火聚の如く、隻字を吐く事、生鐵櫃の如し。英倫豪傑の上士ありて、見道得悟の後二十年の精神を盡す者にあらずんば、たやすく涯際を測ること能はず。然るを今時杜撰の禪徒は、外に參玄の功なく、内に見性の眼無うして、種々殊勝の風情を成して、口には時々念佛して、我は是れ禪にして淨土を兼ねる者なりと。笑ふに堪ふ可けんや。伏して希ふ所は、忠勇傑烈の上士、義氣憤發の英雄、軀命を惜まず、身財を省

みず、誓つて佛祖不傳の關棧子を踏躐し、難入難透の荆棘林を抜却し、禪門向上の堂奥に端居し、臂に奪命の神符を掛け、口に法窟の爪牙を咬み鳴らし、普ねく西東の衲子を惱害して、再び已墜の眞風を挽回し、祖庭孤危の春色を發揚せんことを。

老夫昨夜感ずる處ありて、燈下に獨り此法語を書す。書して此に到り覺へず手を拍して失笑す。如何となれば、初めは貴姉の爲めに親しく見道得力の指南を書き出して、夜深け人靜かに半睡半醒の時に至り、覺へず祖道衰滅の悲嘆を書すること數十行、是れ市人は常に愛して利を談じ、山人は常に愛して山中の事を説くものにして、老夫もまた然り。昨大唐の寺院一字も残らず頽廢する事を聞き、且驚き且悲しみ、怏々として樂まず、終に計らずも別調の中に吹かれて其の亡ぶる所以の端由を書す。恰も愁人の寐語にも愁語を説くに似たり。老夫平生嗟悼し慨念する處の閑妄想、是を愁ふる事深し。故に此を説く事切なり。

さりながら皆是讚佛乘の縁にて侍れば、詮なき事とな嫌ひ玉ひぞ。是を序にて参禪學道の人々の勇猛精進の助にもなれかしとの寸志計りに候。唯だ返へす返へすも是非々々一回隻手の聲を聞届け、永劫不退の願輪に鞭うち、菩薩の五行を行じて法成就に到るべきぞと、間断なく御精出さるべく候。在家にもせよ、出家にもせよ、永劫不退の大誓是れ無くては、如何程の萬善萬行を行じ候ても、畢竟生死の内を出てず、菩薩の威儀をだに了知し侍れば、生死即ち是れ出離なるぞと覺悟可有之候。少分にても隻手の聲を御聞届けられ候覺之れ有るに於ては、書中を以てなりとも可被仰聞候。心に浮びもて行く事ども、前後を顧みず、夜中相認め侍れば、文言も拙く字跡も見苦しく候へば、他見は憚入候。穴賢。

叢 柑 子 終

白隱和尚全集編纂會編

白隱和尚全集 全八卷

- ▼ 菊判野組布表紙洋装天金函入
- ▼ 上質紙印刷每卷約五百頁
- ▼ 精巧玻璃版口輪數葉每卷挿入
- ▼ 頒布實價 壹部金四拾四圓也

◎御希望の方には御申込次第内容説明書贈呈します。

白隱和尚全集 (全八卷) 目次要覽

第一卷 龍澤開祖神機獨妙禪師年譜・獨妙禪師年譜補註・荆棘叢談・壁生草・寶鑑
 貽照・東嶺和尚年譜・至道無難庵主禪師行錄・即心記・自性記・正受老人
 崇行錄・偈頌。

第二卷 荆叢毒藥・同拾遺・息耕録開筵普説。

301
69

第三卷 槐安國語・槐安國語骨董稿。

第四卷 寒山詩關提記聞・寒林貽寶・隻手音聲。

第五卷 布鼓・再靴布鼓・假名因緣法語・遠羅天釜・寶鏡窟之記・於仁安佐美・叢柑子・夜船閑話・邊鄙以知吾・さしも草。

第六卷 八重葎・假名葎・おたふく女郎粉引歌・主心お婆々粉引歌・安心法興利多

多記・坐禪和讚・子守唄・草取唄・福來進女他十三篇。

第七卷 退養雜毒海・宗門無盡燈論・願力辨・五家參詳要路門・快馬鞭・自笑錄。

第八卷 靈源和尚遺錄・同法語集・寶藏萬

藏峙・爛枯柴・斯經和尚遺稿・願

心道場旨趣・圓桂和尚語錄・九峰

和尚語錄・拾遺。

昭和十年七月一日印刷
昭和十年七月五日發行

夜船閑話・叢柑子與贈
定價金壹圓貳拾錢

東京市赤坂區田町七丁目三番地
編者發行 草村 松雄

東京市京橋區西一丁目七番地
兼印刷者 福神製本印刷所

東京市赤坂區田町七丁目三番地
印刷所 福神製本印刷所

發行所 龍吟社

電話赤坂區四番・編輯東京R200番

終